

(有田)

豊明市の「チームオレンジちゃっと」の紹介をさせていただきます。豊明市中部地域包括支援センターで、認知症地域支援推進員を担当しております有田と申します。よろしくお願いいたします。

最初に、豊明市の概況から説明させていただきます。

豊明市なんですけども、豊明市は名古屋市の東南部に位置する人口 69,000 人からなる市になっております。高齢化率は令和 2 年度 4 月末時点で 25.8%、人口構成は、前期高齢者層に山がありまして、今後 10 年の後期高齢者人口の伸びが著しい地域特性となっています。

豊明市の地域包括支援センターは 3ヶ所設置されておりまして、それぞれ市より委託を受けて運営しています。認知症地域推進員は、各地域包括支援センターに 1 人ずつ、それから他に市や社会福祉協議会の方も配置されております。

まず、豊明市におけるチームオレンジの経過過程を最初に説明させていただきますと、豊明市においては、1 からチームオレンジという団体を作り上げたわけではなく、すでに生活支援を行っている団体がございます。そちらの団体に認知症サポーター養成講座とフォローアップ講座を行う形で、認知症理解を深めてもらって、これでチームオレンジという形をとらせてもらいました。豊明市ですでに生活支援を行って、生活支援の方を行っている団体「豊明市おたがいさまセンターちゃっと」というところがあるので、こちらでも設立過程の部分から説明の方をさせていただきますと思います。

この「豊明市おたがいさまセンターちゃっと」の特徴を最初に説明させていただきますと、支援内容については、日常管理など、日常生活を送る上で必要不可欠な部分である、日常生活支援が主になっております。その支援範囲については、市内全域を網羅して、利用方法については、支援 1 単位である 30 分分を、チケット 1 枚 250 円で購入するという形になっています。こちらを利用する前には、この事務局の方に委託しておりますコーディネーターの方がいるんですけども、コーディネーターさんが必ず利用者の方の自宅に赴いて、面談をするので、その際にコーヒーチケットのように必要枚数分を購入してもらう形をとっています。コーディネーターの方が、利用者の方のニーズと照らし合わせながら、事務局に登録しているサポーターの方とマッチングをするという形になっております。

このちゃっとというのができるまでは、市内にある、いくつかの小さな NPO 法人やシルバー人材センター、各協同組合なんかは特に生活支援にあたっているという状況でした。

ただ、各団体とも活動はそれぞれよく行っているんですけども、どうしてもその活動範囲というのが限定的なものになっていたのも、どうしてもその支援を受けられる方も、一部の方に留まっているという状況でした。

このため市の方では、共通の方法をもって支援活動を行えないかと長年地域で支え合い活動を実践していたコープあいちさんと JA あいち尾東さん、もう一つ南医療生活協同組合のこの3協同組合で、協議を重ねていって、それぞれの組合の特徴や課題を洗い出すところから始めていきました。

コープあいちであったら電話注文で注文を受けて、配布を市内全域で行ってくれるという強みがありましたし、JA あいち尾東さんだったら豊明市の、北エリアは田畑がすごく多いんで、そちらに強い特徴がありました。

また、南医療生活協同組合さんは、名古屋市の緑区の方に母体があるので、その緑区に隣接している豊明市の南エリアの方に強いという特徴がありました。ただ、先ほども説明した通り、やはりその活動範囲が限定的になっているということが課題として上がってきました。そのため、共通の支援方法を持って支え合い活動を行っていて、その活動をすべての住民に見える形ということで、輪を広げていこうということで3協同組合との合意に至りました。

ただ、実務を行うにあたっては、それぞれ、複数の組合が協力しあうことになるために、どのような支援方法をとるかというところについては、しっかりと話し合いが行われました。組合によっては、無償で支援の方を行うということもありましたし、また有償で支援を行うということもありましたので、こちらに関しては、南医療生活協同組合が行っている、おたがいさま運動という組合員同士で行う互助活動、こちらの方をベースにさせてもらいまして、こちらの方に30分250円という料金でやっていこうと思って合意しました。

ただ、支援に初めて行くには、ちゃっとの組合員となる生活サポーターの方がいないと、支援を始められないので、最初は、ちゃっとに協力をしてくれる3協同組合員の方から、事務局を行っている講習会の方、こちらの方を受講していただいて、今後こういう形で支援活動を行っていきます、注意事項はこんなことがあります。こういったことを理解していただいて、始まってきました。

ただ受講回数を重ねていきますと、活動員の方の受講も頭打ちとなっていくので、こうしたところで、当初の方針どおり住民の方に、支え合いの場を広げていこうという形でシフトしていきました。住民の方々に向けた講習の働きかけは、地域に点在しているサロンや様々な機会を通して行ってきたんですけども、時間の経過を重ねていくうちに、事務局の方で、各行政区ごとに、これだけの相談数、またこれだけ困っている人がいるというのと、あとどれだけサポーター数があるのかという比較データを出せるようになってきたので、そういったデータが出せる地域に関しては、マンパワーが足りないところは、区長や町内会長、巻き込みながら働きかけておりまして、そういった形で地域講習会の方行っていました。

今現在の登録サポーター数は、今年の11月1日時点をもって283人まで増え

ておりまして、このサポーター数の内訳も、当初、組合の活動員が多かったんですけども、今は、住民のサポーターの方が圧倒的に多くなっているという状況です。このサポーターさんの方の年齢構成を見ていくと、8割以上が60代以上ということで、まさに「おたがいさま」って呼べるような運動をできる支援団体になっています。

こちらのちょっと事務局の役割を改めて見ていきますと、まず一番大きなところでは、地域で生きづらさを感じている市民一人一人の困りごとを受け付けて、生活サポーターにつなぐコーディネーターとしての役割が大きく占めています。

今回の研修では、認知症サポーター活動事例というテーマなので、認知症の方に焦点があたるんですけども、地域で生きづらさを感じている方というのは、高齢に伴う様々な疾患や何らかの障害を抱えている方そんな複合的な要因になって、そのような状況になっている方が多く見られます。

そのひとつに認知症という要因があるんですけども、認知症だけに着目してしまうと、支援の片手落ちとなってしまうこともあるので、ちょっとでは、日常生活に対する困りごとを全体的に取り組めるような支援団体になっております。こういった形でお話していくのは、想像できるかと思うんですけども、地域包括ケアシステムを作り上げていく上で、必要になっている生活予防そちらの生活支援の部分を担当していけるような団体になっておりますね。

他にも、ちょっと事務局では、サポーターの交流会だったり、学習講座開催の計画なども行っていて、生活支援が主体という特徴があるので、過去には、教育実習であったり、掃除をテーマにした、講習会なども行っています。こちらも、チームオレンジを設置するにあたっては、推進メンバーとちょっと事務局の方で協議をいたしまして、この学習講座の枠の中に、認知症サポーター養成講座とフォローアップ講座の方を計画してもらいました。

このサポーターの方に、まず認知症に対する理解や当事者の方の気持ちを知ってもらえるように、サポーター養成講座を開催したんですけども、豊明市の方では、認知症サポーター養成講座を行うときは、なるべくわかりやすいように伝えたいという気持ちもありまして、ちょっと開催の時にひと工夫しております。最初に座学を行うというのはもちろんなんですけども、ボランティアメンバーも主体となって動いているので、場面設定をした寸劇を行う。で、今はちょっとコロナ禍によってできないんですけども、参加者にも参加していただいて、実際どんな対応したらいいか、皆で一緒に考えていくという参加型の形で開催しております。

また、当事者で有名な、丹野智文氏の動画メッセージの方も活用させていただいて、伝えさせてもらっております。この生活サポーターの方に、認知症理解を

深めてもらうきっかけになった部分なんですけども、サポーターの方が、生活支援を通していくなかで、認知症の中核症状である記憶障害が困りごとの要因となっている方の存在が一定数いるということが見えてきたからということになります。こういった声というのは、認知症地域支援推進員として、サポーターの方の交流会に、足を運んで、事務局のコーディネーターや生活サポートに支援に入っている方、そういった方から直接意見を拾い上げていくことで分かってきました。

ちょっとへの依頼内容というものが、こちらを見てもらったら分かるとおりですけれども、掃除やゴミ出し、買い物、通院・外出、話し相手、調理、服薬の声かけなど、こういった形で多岐にわたっているんですけども。例えばごみ出しの部分を見ていくと、体の病気がある、または建物の構造上エレベーターがなく、ゴミ出しに困っているという、そういった方もいらっしゃいます。

やはり記憶障害などがあって、例えばカレンダーに丸印をつけていても、出すのを忘れてしまう。そういった方もいらっしゃいます。あと、通院の付き添いというところでも、やはり同じように予約をしても予約をすっぽかしてしまうと、そういった方もいらっしゃいましたし、あと記憶障害があったために、今まで行けていた通いの場の方へなかなか参加するのが難しくなってきた、そういった方もいらっしゃいました。先ほどでは、生きづらさを感じる要因というのは認知症だけじゃなくて、複合的にあると言いましたけれども、やはり記憶障害など、認知症の諸症状で困っていらっしゃるという方も、一定数いるということがわかってきた次第です。

それを、改めて数値にして出してみようということで作成された表がこちらのスライドになるんですけども、左円グラフの方にあるとおり、昨年度 175 名の利用者があったんですけども、こちらの 67%の方が、要支援1以上の介護認定を受けていらっしゃる、そういったことがわかってきました。またその右の表なんですけども、その67%のうち、認知症自立度Ⅱa以上の方、こちらの方を拾っていくと、やはりその中からまた38%の方が、(認知症自立度)Ⅱa以上になっているところではわかってきました。

これらのことからですけれども、日常生活の支援を行っているちょっとサポーターの方々というのは、サポーター養成講座を受ける前から、知らず知らずの内に、認知症初期の方であったり、MCIであったり、そういった方への支援に入っているという状況がわかってきたところですね。そういったこともあって、改めて認知症への理解を深めてもらった次第でございます。

こちらの実際に支援に入っている風景なんですけれども、例えば調理の部分であったりとか、あと先ほどもお話したようなゴミ捨てる部分ですとか、あと買い物代行ということもあつたりします。あとこちらの写真には載っ

ていないんですけれども、認知症当事者の方の自宅に赴いて、女性の話し相手やサポーターの方と一緒に紙でできるような小さなゴミ箱づくり、そういったものを行って、一緒に近所の保育園に届けに行くと。それを使ってもらおうという、そういったような活動もあります。また話し相手という部分では、認知症当事者の方だけではなくて、アルコール中毒の方という方もいらっしゃいます。

そういったこと、そういった支援内容もありますけれども、ここら辺は、日常の家事や話を聞くことが上手である主婦の方が非常に多いですね。あと生活サポーターさんでは、男性の方もおりますので、ちょっとした力仕事や庭の剪定などを担ってくださる方も多くいらっしゃいます。

豊明市の方には、藤田医科大学病院もありますので、こちらの大学生や看護学生さんなどもサポーターになってくださっているのです、朝学校に行く前とか、そういった形で支援に入る方もいらっしゃいます。

こういった形で、サポーターの方に、認知症の理解を深めてもらって、支援に入ってもらっているんですけども、チームオレンジを設置するにあたっては、フォローアップ講座というものが必須になってきますので、このフォローアップ講座で何を取り上げていくかという時に關しては、しっかりと、推進員メンバーと、ちゃつとの事務局のメンバーとしっかりと話し合いを行っていきました。

まず、フォローアップ講座を行っていく上で、何を大切にするかというところから決めたんですけれども、フォローアップ講座で、テーマを決めて、その内容を、講話形式だけで伝えていくのはやめよう。そういった形で話し合いました。

普段サポーターさんが、行っている支援内容から、知らず知らずの内にもたらされる効果や普段サポーターさんが行っていることがいかにこういうことであるかと、そういったことを、肯定していくような形に、そういった肯定感につなげてあげられるような、内容にしようというところを示させてもらいました。

テーマを決めるにあたっては、どんな内容を話し合うようにしていこうかというところでは、まず、サポーターのニーズを知るところから始めなければいけないので、やはり認知症地域支援推進員として、改めてサポーター交流会のほうに足を運んで、直接意見を聞かせてもらいました。

あと、ちゃつとの事務局の方にも、協力をいただいて、アンケートなどを通して、ニーズの方を拾っていきました。そうした中で、一番多い意見として、上がってきたのはコミュニケーションというワードになります。やっぱり皆さんコミュニケーションで困っていらっしゃるというところだったので、まずは、コミュニケーションの基礎ともいえる、傾聴をテーマにしようということで決まりました。

どのような支援内容であっても、サポーターの方が支援に入る時というのは、

やはり利用者の方と直接会話をすることになりますので、その際にも、普段利用者の方が胸にため込んでいる思いを吐露されるということはよくあります。実際に地域の高齢者の中には、地域の中でなかなか自分の話を聞いてもらえる方がいない、また親族と接触する機会も少ないということで、本当にたくさんのことを胸に抱え込んでいるという方が本当に多くみえます。

なので、実際に支援に来てくれたサポーターの方に、自分は何もできないよ。あと死んでしまいたいんだというようなことも話されることがあるということが聞こえてきました。

あと、これ認知症初期の方でもあるんですけども、自身の心情を吐露するとき、頭の中を整理してからでない、しっかりと返事ができない。みんな喋るのが速くてついていけないというような声も聞こえてきます。

そういった声に対して、生活サポーターの方は、相手の心情をくみ取りながら、しっかりと応えてくださっているんですけども、やはり、後で本当に自分の対応でよかったんだろうか、自分の対応が間違ってるんじゃないかなという不安を常に抱えている状況というのがわかってきました。

そういったことがあったので、フォローアップ講座の方、実施する際にはサポーターの方から事前に質問を拾い集めておいて、こういった場面ではどういう対応したらいいんだろうかと。そういった具体例などをお答えするとともに、実際に話を傾聴することで、相手にもたらされる効果、そういったところもわかりやすい表現で伝えてきました。ただ、支援に入るサポーターさんというのは、介護職員初任者研修で介護福祉士の資格を持ったプロではないので、利用者の方との距離感に対しても、悩みを持つての方というのも多くみえました。

実際に、最初、「黙っておれば分からんで」と言って茶菓子などを提供してくださる方もいらっしゃるんですけども、そういったことを最初に受け入れてしまうと、「今度あんたの連絡先教えて」とどンドンエスカレートして距離感を詰められてしまうという方もいらっしゃるの、そういったところの利用者との距離感に対する考え方というところもしっかりと条件を出していただきました。

こういった形でフォローアップ講座を行っていただきましたけども、こちらは、今回だけで終わりにするんじゃなくって、次年度以降も何度も何度も継続しながら、認知症に対する理解の深い支援団体となっていっていただけるように、活動していきたいと思っております。

最後に、豊明市のチームオレンジができるまでの流れを改めて簡単に振り返りたいと思います。

まず、支援団体について数えてみたんですけども、それは市町村によって、規模や属性というのは全く違いますので、あと地域の地域特性に合わせて、支援団体の規模が広がっていく形になると思います。豊明市の場合は、人口 69,000 人

程度の規模であるので、共通の方法をもって市内全域を網羅するという形となりました。

そして、支援対象についてなんですけども、豊明市の場合は、認知症で日常生活に困っている方への支援に入るというよりも、日常生活に困っている方を対象としていて、認知症が要因となって困っている方も併せて支援していくという形をとっています。ただ、認知症の症状が要因で困っている方もいらっしゃるもので、サポーターの方々には、認知症の理解を深めてもらうために分かりやすい形で、認知症サポーター養成講座を開催いたしました。

最後に、支援に入っているサポーターの方から、ニーズを拾い上げていきながら、フォローアップ講座のテーマを決めて、サポーターの方々の支援内容を肯定できるような形で実施して、チームオレンジの設置という形になっております。

以上が豊明市のチームオレンジができるまでの流れとなります。

最後にですが、今年度、コロナウイルスによって、多くの活動が中止になるイレギュラーな一年になっておりますので、こちらの活動状況も少しだけお伝えさせていただきたいと思っております。豊明市のちゃっとに関しても、やはり感染拡大期というのは、多くの支援内容を中止せざるを得ない状況になりました。ただ、一人暮らしどうしても困っている方、買い物代行やごみ出し、そういった日常生活に必要不可欠であって、また短時間の接触で済むような状況というものに関してはほとんど継続してきたという状況になっております。

今は、社会情勢も見ながら、徐々に活動範囲を広げていって、現状は、コロナ以前の活動ができておりますけども、これからまた社会情勢の方でどうなっていくかわからないので、そこは社会情勢に応じて対応させていただく形になります。

以上、豊明市チームオレンジの紹介となります。

御静聴ありがとうございました。

(司会)

有田様ありがとうございました。

それでは質疑応答の時間に移ります。ご質問ある方は挙手にてお知らせください。せっかくの機会ですので、ご質問等ございませんでしょうか。

(受講者の方)

お話ありがとうございました。

豊明市おたがいさまセンターちゃっとについてお聞きしたいんですけども、そちらには3つの会社があって、市から補助金が出ているのか、それとも利用者の方がチケットを買うという話だったんですけども、そのお金を収益で、やっ

て、どこかの場所に常駐するという感じでやっているのかという形でやっているとか、どんな感じでやっているのかということと費用面のことをお聞きしたいです。

(有田)

まず、費用面の方なんですけども、前者の考え方でして、こちらの愛知県版チームオレンジ事例集の方に、豊明市のチームオレンジが載っておるんですけども。こちらの方。地域支援事業費の方が運営財源となっておりますので、委託を受けてやっております。

センターの方なんですけども、本当にセンターというか公民館のようなところが事務局になっていて、そちらに今現在5人のコーディネーターが在籍しているという状況。で、相談が入って、実際にこの方であればこの方をお願いしようかというコーディネーターさんの考えで、豊明市内のサポーターさんに電話連絡をして、お願いをしていくという形になりますね。

こういったことでよかったですでしょうか。

(受講者)

チケットの収入というのは、サポーターさんの収入になるんですか。

(有田)

そうですね。

250円の収入としてもいいですし、あとは、時間貯金という形で使うこともできるとしております。

もし自分が困ったときに、今手持ちに10枚持っていたら、その10枚は自分のために使うということもできます。ほとんどの人は善意でやっているなので、時間貯金という形をとっていると思います。

(受講者)

どうもありがとうございます。

(司会)

他に質問はよろしかったでしょうか。

有田様、ありがとうございました。皆様もう一度拍手をお願いします。